

曾谷殿御返事

弘安二年八月一日 五八歳

焼き米二俵給び畢んぬ。

米は少しと思し食し候へども人の寿命を継ぐ物にて候。命をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は説かせ給へり。米は命を継ぐ物なり。譬へば米は油の如く、命は灯の如し。法華経は灯の如く、行者は油の如し。檀那は油の如く、行者は灯の如し。

一切の百味の中には乳味と申して牛の乳第一なり。涅槃経の七に云はく「猶諸味の中に乳最も為れ第一なるが如し」云云。乳味をせんずれば酪味となる。酪味をせんずれば乃至醍醐味となる。醍醐味は五味の中の第一なり。法門を以て五味にたとへば、儒家の三千、外道の十八大経は衆味の如し。阿含経は醍醐味なり。阿含経は乳味の如く、観経等の一切の方等部の経は酪味の如し。一切の般若経は生蘇味、華嚴経は熟蘇味、無量義経と法華経と涅槃経とは醍醐の如し。又涅槃経は醍醐のごとし、法華経は五味の主の如し。妙楽大師云はく「若し教旨を論ずれば法華は唯開権顕遠を以て教の正主と為す。独り妙の名を得る意此に在り」云云。又云はく「故に知んぬ、法華は為れ醍醐の正主」等云云。此の釈は正しく法華経は五味の中にはあらず。此の釈の心は五味は寿命をやしなふ。寿命は五味の主なり。天台宗には二つの意あり。一には華嚴・方等・般若・涅槃・法華同じく醍醐味なり。此の釈の心は爾前と法華とを相似せるににたり。世間の学者等此の筋のみを知りて、法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆへに、諸宗にたぼらかさるゝなり。開未開、異なれども同じく円なりと云云。是は迹門の心なり。諸経は五味、法華経は五味の主と申す法門は本門の法門なり。此の法門は天台・妙楽粗書かせ給ひ候へども、分明ならざる間学者の存知すくなし。此の釈に「若し教旨を論ずれば」とかゝれて候は法華経の題目を教旨とはかゝれて候。開権と申すは五字の中の華の一字なり。顕遠とかゝれて候は五字の中の蓮の一字なり。「独り妙の名を得る」とかゝれて候は妙の一字なり。「意此に在り」とかゝれて候は法華経を一代の意と申すは題目なりとかゝれて候ぞ。此を以て知んぬべし、法華経の題目は一切経の神、一切経の眼目なり。大日経等の一切経をば法華経にてこそ開眼供養すべき処に、大日経等を以て一切の木画の仏を開眼し候へば、日本国の一切の寺塔の仏像等、形は仏に似たれども心は仏にあらず、九界の衆生の心なり。愚癡の者を智者とすることは是より生まれり。国のついでのみ入りて祈りとならず。還って仏變じて魔となり鬼となり、国主乃至万民をわづらはす是なり。今法華経の行者と檀那との出来する故に、百獸の師子王をいとひ、草木の寒風をおそる

ゝが如し。是は且くをく。

法華経は何なる故ぞ諸経に勝れて一切衆生の為に用ゆる事なるぞと申すに、譬へば草木は大地を母とし、虚空を父とし、甘雨を食とし、風を魂とし、日月をめのととして生長し、華さき菓なるが如く、一切衆生は実相を大地とし、無相を虚空とし、一乗を甘雨とし、已今当第一の言を大風とし、定慧力莊嚴を日月として妙覚の功德を生長し、大慈大悲の華さかせ、安樂仏果の菓なって一切衆生を養ひ給ふ。

一切衆生又食するによりて寿命を持つ。食に多数あり。土を食し、水を食し、火を食し、風を食する衆生もあり。求羅と申す虫は風を食す。うぐろもちと申す虫は土を食す。人の皮肉骨髓等を食する鬼神もあり、尿糞等を食する鬼神もあり、寿命を食する鬼神もあり、声を食する鬼神もあり、石を食する魚、くろがねを食するばくもあり。地神・天神・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・菩薩・仏は仏法をなめて身とし魂とし給ふ。例せば乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき。一閻浮提の主なり、賢王なり。此の王はなに物をか供御とし給ふと申せば、白馬の鳴く声をきこしめして身も生長し、身心も安穩にして代をたもち給ふ。れいせば蝦蟇と申す虫の母のなく声を聞いて生長するがごとし。秋のはぎのしかの鳴くに華のさくがごとし。象牙草のいかづちの声にはらみ、柘榴の石にあふてさかうるがごとし。されば此の王、白馬ををほくあつめてかはせ給ふ。又此の白馬は白鳥をみてなく馬なれば、をほくの白鳥をあつめ給ひしかば、我が身の安穩なるのみならず、百官万乗もさかへ、天下も風雨時にしたがひ、他国もかうべをかたぶけて、すねんすごし給ふに、まつり事のさをいにやはむべりけん、又宿業によって果報や尽きにけん、千万の白鳥一時にうせしかば、又無量の白馬もなく事やみぬ。大王は白馬の声をきかざりしゆへに、華のしぼめるがごとく、月のしよくするがごとく、御身の色かはり力よはく、六根もうもうとして、ほれたるがごとくありしかば、きさきももうもうしくならせ給ひ、百官万乗もいかんがせんとなげき、天もくもり、地もふるひ、大風かんぱちし、けかち・やくびやうに人の死する事、肉はつか、骨はかはらとみへしかば、他国よりもをそひ来たれり。此の時大王いかんがせんとなげき給ひしほどに、せんずる所は仏神にいのりにはしくべからず。此の国にもとより外道をほく、国々をふさげり。又仏法という物ををほくあがめをきて国の大事とす。いづれにてもあれ、白鳥をいだして白馬をなかせん法をあがむべし。まづ外道の法にをほせつけて数日をこなはせけれども、白鳥一疋もいでこず、白馬もなく事なし。此の時外道のいのりとどめて仏教にをほせつけられけり。其の時馬鳴菩薩と申す小僧一人あり。めしいだされければ、此の僧の給はく、国中に外道の邪法をとどめて、仏法を弘通し給ふべくば、馬をなかせ

ん事^易やすしといふ。勅宣に云はく、をほせのご^仰とく^如なるべしと。其の時馬鳴菩薩、三世十方の仏に^祈きし^請やうし申せしかば、たちまちに白鳥出来せり。白馬は白鳥を見て一こへなきけり。大王馬の^声を一こへきこしめして眼を開き給ひ、白鳥二ひき乃至百千いできたりければ、百千の白馬一時に悦びなきけり。大王の御いろな^治を^蝕る^本こと、日しよくのほんに^復ふくするがごとし。身の力、心のはかり事、先々には百千万^倍いこへたり。きさきもよろこび、大臣公卿いさみて、万民もたな心をあはせ、他国もかう^頭べ^傾をかたぶけたりと^見みて候へて候。

今のよも又是にたがうべからず。天神七代・地神五代、已上十二代は成劫^{じょうこう}のごとし。先世の^戒かい^力りきと福力とによて、今生のはげみ^勵なけれども、国もおさまり人の寿命も長し。人王のよとなりて二十九代があひだは、先世の^戒かい^力りきもすこし^弱よはく、今生のまつり事もはかなかりしかば、国にやうやく三災七難をこりはじめたり。なを^漢かん^土どより三皇五帝の世を^治をさむ^文べき^書ふみわたりしかば、其れをもて神をあがめて国の災難をしづむ。人王第三十代欽明天王の世となりて、国には先世の^戒かい^福ふく^強く^盛う^盛すく、悪心^多が^多う^罪じやう^重の物をほく出で来て、善心はをろかに悪心はかしこし。外典の^教をしへはあさし、^罪つ^重みもをもきゆへに、外典すてられ内典になりしなり。れいせば、もりやは日本の天神七代・地神五代が間の^もも^やそ^がみ^元を^元あがめたてまつりて、仏教をひろめずしてもとの外典となさんといのりき。聖徳太子は教主釈尊を御本尊として、法華經・一切經をもんじよとして、両方の^勝せう^負ぶありしに、ついに^勝は^勝ま^勝け^勝仏はかたせ給ひて、神国はじめて仏国となりぬ。天竺・漢土の例のごとし。「今此三界皆是我有」の經文あらはれさせ給ふべき^{ついで}序なり。

欽明より桓武にいたるまで二十余代、二百六十余年が間、仏を大王とし、神を臣として世を^治をさめ給ひしに、^劣仏教はすぐれ^劣神はをとりたりしかども、未だよを^世さ^治まる事なし。いかなる事にやとうた^疑が^疑は^疑り^疑し程に、桓武の^ぎぎ^{ょう}ぎ^{ょう}御宇に^下伝教大師と申す^{かん}かん^が聖人出来して^{かん}かん^が勘へて云はく、神はまけ^下仏はかたせ給ひぬ。仏は大王、神は臣かなれば、上下あひついで、^礼れ^儀い^治ぎ^思た^思ゞ^思しければ、^治国中をさ^思まるべしとをも^静ふに、^不国のしづかなら^審ざる事^不ふ^審しんなるゆへに一切經を^大かん^科がへて候へば、道理にて候ひけるぞ。仏教にをほき^大なると^科がありけり。一切經の中に法華經と申す大王をはします。ついで華嚴經・大品經・深密經・阿含經等はあるいは臣の位、あるいはさぶ^侍ら^位いの^位くらい、あるいは^民た^民みの^民位なりけるを、或は般若經は法華經にはすぐれたり^三論、或は深密經は法華經にすぐれたり^法相、或は華嚴經は法華經にすぐれたり^華嚴、或は律宗は諸宗の母なりなど申して、一人として法華經の行者なし。世間に法華經を^鳥讀^誦するは還^失つてをこづき^失うしなうなり。之に依って天もい

かり、守護の善神も力よはし云云。所謂「法華經をほむといえども還つて法華の心をころす」等云云。南都七大寺・十五大寺、日本国中の諸寺諸山の諸僧等、此のことばをきゝてをほきにいかり、天竺の大天・漢土の道士、我が国に出来せり。所謂最澄と申す小法師是なり。せんずる所は行きあはむずる処にて、かしらをわれ、かたをきれ、をとせ、うて、のれと申せしかども、桓武天皇と申す賢王たづねあきらめて、六宗はひが事なりけりとして初めてひへい山をこんりうして、天台法華宗とさだめをかせ、円頓の戒を建立し給ふのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそへをかる。せんずる所、六宗を法華經の方便となされしなり。れいせば神の仏にまけて門まぼりとなりしがごとし。日本国も又々かくのごとし。法華最第一の經文初めて此の国に顯はれ給ひ「能竊為一人、説法華經」の如来の使ひ初めて此の国に入り給ひぬ。桓武・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本一州皆法華經の行者なり。

しかれば梅檀には伊蘭、釈尊には提婆のごとく、伝教大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわたりて大日經・真言宗をならい、日本国にわたりてありしかども、伝教大師の御存生の御時は、いたう法華經に大日經すぐれたりといふ事はいはざりけるが、伝教大師去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給ひてのち、ひまをえたりとやをもひけん、弘法大師去ぬる弘仁十四年正月十九日に、真言第一・華嚴第二・法華第三、法華經は戲論の法、無明の辺域、天台宗等は盗人なりなど申す書どもをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて、七宗に真言宗を申しくはえて、七宗を方便とし、真言宗は真実なりと申し立て畢んぬ。其の後日本一州の人ごとに真言宗になりし上、其の後、又伝教大師の御弟子慈覚と申す人、漢土にわたりて天台・真言の二宗の奥義をきはめて帰朝す。此の人金剛頂經・蘇悉地經の二部の疏をつくりて、前唐院と申す寺を叡山に申し立て畢んぬ。此には大日經第一・法華經第二、其の中に弘法のごとくなる過言かずうべからず。せむせむにせうせう申し畢んぬ。智証大師又此の大師のあとをついで、をんじやう寺に弘通せり。たうじ、寺として国のわざはいとみゆる寺是なり。叡山の三千人は慈覚・智証をはせずば、真言すぐれたりと申すをばもちいぬ人もありなん。円仁大師に一切の諸人くちをふさがれ、心をたぼらかされて、ことばをいだす人なし。王臣の御きえも又伝教・弘法にも超過してみへ候へば、えい山・七寺、日本一州一同に法華經は大日經にをとりと云云。法華經の弘通の寺々ごとに真言ひろまりて、法華經のかしらとなれり。かくのごとくしてすでに四百余年になり候ひぬ。やうやく此の邪見ぞうじやうして八十一乃至五の五王すでにうせぬ。仏法うせしかば王法すでにつき畢んぬ。あまさへ禪宗と申す大邪法、念仏宗と申す小邪法、真言と申す大悪法、此の悪宗はなをなら

べて一国にさかんなり。天照太神はたましいをうしなつて、うちこをまぼらず、八幡大菩薩は威力よはくして国を守護せず、けつくは他国の物とならむとす。日蓮此のよしを見るゆへに「仏法中怨、俱墮地獄」等のせめをおそれて、粗国主にしめせども、かれらが邪義にたぼらかされて信じ給ふ事なし。還つて大怨敵となり給ひぬ。法華經をうしなふ人国中に充滿せりと申せども、人しる事なければ、たゞぐちのとがばかりにて有りしが、今は又法華經の行者出来せり。日本国の人々癡かの上にかかりををこす。邪法をあいし、正法をにくむ、三毒がうじゃうなり。日本国いかでか安穩なるべき。壞劫の時は大の三災をこる、いはゆる火災・水災・風災なり。又滅劫の時は小の三災をこる、ゆはゆる飢渴・疫病・合戦なり。飢渴は大貪よりをこり、やくびやうはぐちよりをこり、合戦は瞋恚よりをこる。今日本国の人々四十九億九万四千八百二十八人の男女、人々ことなれども同じく一つの三毒なり。所謂南無妙法蓮華經を境としてをこれる三毒なれば、人ごとに釈迦・多宝・十方の諸仏を一時にのり、せめ、流し、うしなうなり。是即ち小の三災の序なり。

しかるに日蓮が一類、いかなる過去の宿じうにや、法華經の題目の檀那となり給ふらん。是をもてをぼしめせ。今梵天・帝釈・日月・四天・天照太神・八幡大菩薩、日本国の三千一百三十二社の大小のじんぎは過去の輪陀王のごとし。白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。白馬のなくは我等が南無妙法蓮華經のこえなり。此の声をきかせ給ふ梵天・帝釈・日月・四天等いかでか色をまし、ひかりをさかんになし給はざるべき、いかでか我等を守護し給はざるべきと、つよづよとをぼしめすべし。

抑 貴邊の去ぬる三月の御仏事に驚目其の数有りしかば、今年一百余人の人を山中にやしなひて、十二時の法華經をよましめ談義して候ぞ。此らは末代悪世には一えんぶだい第一の仏事にてこそ候へ。いくそばくか過去の聖靈もうれしくをぼすらん。釈尊は孝養の人を世尊となづけ給へり。貴邊あに世尊にあらずや。故大進阿闍梨の事なげかしく候へども、此又法華經の流布の出来すべきいんえんにてや候らんとをぼしめすべし。事々命ながらへば其の時申すべし。

八月十一日

日 蓮 花 押

曾 谷 入 道 殿 御 返 事